

吹田子ども支援センター…不登校などの悩みを抱える子どもの支援

語り手の森本さんは、「吹田子ども支援センター」の代表であり、吹田市の中学校の元教員。

深刻な子育て・教育問題、とりわけ不登校の問題に対して市民としても取り組もうと呼びかけた。呼びかけに、元教員仲間や市民・大学生が集まり、千里山に市民団体を設立。

元教師ならではの特徴を生かしながら、不登校児の支援や教育についての相談などを行っている。



語り手 森本英之さん

1 活動の目的・内容について

—吹田子ども支援センターは、いつ設立されましたか。その活動を始められた理由を教えてください。

2013年4月…退職教師達が市民に呼びかけ結成

平成25(2013)年4月、教育に関わる支援を基本的な目的として、退職教師が集まり当センターを設立しました。

現在のスタッフは、市内の公立小中学校や吹田在住の元教師が中心で、市

民・市内にある大学の学生・吹田で育った大学生のボランティアも加わっています。事務局は、現在、賛同する主婦の方が担ってくださっています。その他、賛助会員として会費で



2013年4月開所式

活動を支援してくださる方や、当センターの市民サポーターとして、相談内容により弁護士、医師、心理士などの専門職の方の応援があります。

不登校…全国に12万人、吹田の小中学校に300人

主な活動としては、不登校や発達障がいの子どもたちの支援、親の子育て・

教育相談及び教師支援です。

不登校の問題は、いじめ問題などと共に深刻な教育課題です。不登校の小中学生は全国12万人余り、吹田市では300人を超える不登校の子どもがいます。中学校だと平均して1クラスに1人が学校に行けていないような状況です。

不登校のケースの中には、家庭内暴力や家出、自殺願望・自傷行為が伴った場合など緊急な対応を要するものもあり、その場合は一層深刻です。

その一方では、不登校・ひきこもりには、長い経過と複雑な背景があり、子どもの状況や家庭の実情に合わせた継続的・総合的・長期的な支援が必要です。



学習支援

不登校に関わっては、当該学校の教師達による取り組みが行われていますが、吹田市においてもそれをサポートする様々な施策が行われています。学校現場への相談員・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの配置や「光りの森」「学びの森」など適応指導教室の事業、家庭訪問事業、教育センターでの相談等々です。

一方、民間にも不登校・ひきこもりに関して医療機関をはじめ多くの相談場があります。総じて、相談には、多くの時間と高額な費用がかかります。不登校の相談は、長期化するのが通例です。生活や仕事に追われ時間的に余裕がない親は、相談に行くことを断念されるケースがみられます。

また民間の高額の相談料が必要な所には、経済的な事情で継続できなくなる場合が多いのです。

問題の深刻さが基本にあります。様々な取り組みにもかかわらず吹田市の場合も、小中学生の9割以上が学校復帰に至らず、自宅に引きこもっているのが現状です。

—なるほど。具体的にはどんな活動をされていますか。

相談者の都合を優先・相談者の経済事情に配慮

当センターでは、相談日時・回数・場所は、相談者の都合を優先します。休日でも夜間でも、毎日でも相談に応じています。また、当センターでは、経済的事情で相談できないことは避けたいと思い、相談料は、賛助金・寄付金を活用するなどして相談者の過重な負担にならないように工夫しています。スタッフも退職教師や学生・善意の市民が中心ですから、なんとかこれでやりくりしてやっています。

—どのような方が主に相談に来られますか。

親の苦悩に寄り添い、具体的な助言を行います

不登校の相談をされる方の多くは、母親です。

ほとんどの母親は、追い込まれ辛さで涙を流されます。中には、「母子心中を考えた」と話される方もあります。



学習支援

母子家庭で経済的にも生活的にも追い込まれ、相談する相手もなく孤立している方も多いです。さらに、母親自身に病身であったり障がいがある場合の子育ての悩みは一層深刻です。

私は、親の話に耳を傾け、じっくりと時間をかけて聞きます。家族関係・親子関係・生育歴・親の生き方や価値観が垣間見えます。核家族と少子化、豊かさと貧困と格差、消費社会・情報化社会及び地域社会の問題など現代社会の直面する問題が背景として見えてきます。お話をうかがったその後、子育てや教育、家族のあり方や学校との関係、親の子ども対応への具体的な助言を行います。相談者の多くは、具体的な助言を求められ訪ねられるのです。時には、父親など家族や学校関係者等との懇談もおこないます。

—それでは、不登校の子どもたちには、どのように取り組んでおられますか。

家庭訪問を通して人間関係を深め、自宅での学習へ

自宅にひきこもり、私たちが出会うことのできない子の場合は、やむを得ず、

定期的に保護者へのアドバイスを重ねて、出会える機会を待ちます。

家に行けば出会える子どもの場合は、家庭訪問から始めます。家庭訪問は、遠いところでは、大阪南部、北摂各地へ行ったことがあります。

家庭訪問を重ね、子どもとの人間関係が次第に深まり、自宅で学習ができる段階に至れば自宅で学習を始めます。

その後は、子ども達の居場所として開設している「子どもカフェ」まで来られるように働きかけます。

最初から自力で「子どもカフェ」来ることが出来る子どもの場合もありますが、多くの場合、しばらくは保護者やスタッフが車や交通機関を使って送迎したり、自転車で同行したりします。

一不登校の子どもの中で、皆様に伝えたいことはありますか。

スタッフとの会話・人とのふれあいが持つ意味

不登校の子どもの中には、希望や自信を見失っています。また、人への不信に固まっています。



大人が子どもに過剰な期待を押しついたり、強引に対応した結果である場合もあります。

心の傷が深ければ深いほど心を閉ざし、引きこもりの期間が長ければ長いほど学校や社会への復帰が困難となります。

「家庭訪問」や「子どもカフェ」では、スタッフは、多くの時間を不登校の子ども達との会話に費やします。それは、学習支援と同様に大切な取り組みです。

子どもとの会話を通して、学校や社会の動きを伝え、発達段階に応じた知識や判断の必要性を伝えていきます。それが、学校復帰や引きこもりからの歩み出しの助走となります。

子どもの生活リズムを整え、新たな興味を生み出すこと

不登校の子たちの日常は、独りで自室にこもり、ゲームやアニメ、ネット依存などで昼夜逆転の生活サイクルになり、食事を満足に取らずに済ませている場合がよくみられます。

私たちが昼間に家庭訪問をして子どもと出会う事や子どもが「子どもカフェ」に通うことは、生活リズムを回復させるきっかけになり、ひいては不登校克服の第一歩にもなります。

—「子どもカフェ」について詳しく説明して下さい。

「子どもカフェ」は、子どもがくつろぎ過ごす居場所

「子どもカフェ」は、子どもの居場所であり学習場所です。大人がカフェでくつろぎ談話しているように、子どものこの場所でくつろいでもらいたいと名付けました。不登校の子どもは、ここで一日過ごしますし、学校に通えている子どもは、放課後の時間帯から来室します。

「子どもカフェ」には、飲物やお菓子、トランプ・オセロ・将棋や編み物や工作材料を常備しています。

子ども達は、慣れてくると「ただいま」と言って入室し、自ら飲物を作ったり、部屋の掃除も行います。

子ども達が、「子どもカフェ」での生活が始めると、興味が広がりゲームやアニメづけ、ネット依存の生活に少しずつ変化が生じます。

「子どもカフェ」からの外出が可能になれば、スタッフと共に時には街や公園に出かけます。近くの公民館に出向き卓球を楽しむ場合もあります。

それらは、自宅に引きこもっていた子どもたちにとっては、必要な社会参加への歩みなのです。一方、人との関係が苦手な子どもには、同じく通ってきている子ども達と徐々に会話を始めるように働きかけます。一緒にトランプゲー

ムや卓球などを始めることで、子どものつながりが始まり、楽しく会話するようになってきます。

—不登校生の学習についてに説明して下さい。

学習から自信と将来への希望が生まれる

「家庭訪問」や「子どもカフェ」でも子どもの学力状況に合わせた個別学習に取り組みます。



学習支援

継続していくことで、子どもの自信の回復と将来への希望を次第に確実なものにしていきます。進路の助言も行っています。

これは、当センターが小学校・中学校・高校の元教師中心に運営していることの強みであり、当センターの活動の特徴でもあります。

これらの取り組みを通じて、学校復帰、進路の決定等の道が開かれるのです。そのようなケースが次々と生まれてきています

また、学校復帰した子ども、進路決定した子どもたちに対しても、相談や学習支援も継続して行っています。

—相談では、どのような内容が多いですか。

学習・進路に加え…発達障がい（凸凹）の相談が増加

不登校生・登校しぶり子どもの学習・進路の相談の中で、子どもの発達障がい（凸凹）、知的障がいの子どもの相談の占める割合が増えてきています。

発達障がい（凸凹）の子どもに見られる特徴は、人それぞれに違いがあり、空気が読めない、こだわりが強い、人との関係作りが苦手、学習についていけないなどがあります。それらが要因となり、自信を失ったり、学校や地域で孤立したり、時にはいじめを受けたりなどしています。その結果としての不登校・登校しぶりが多いです。その場合は、それぞれの状況を踏まえ、個人に対応する具体的な配慮と支援を行います。学校や家庭など周りの人々が発達障が

い（凸凹）や知的障がいへの理解を求めることもまた必要で具体的な助言も行います。

数年前には、市内の大学の関係者から依頼され、発達障がい（凸凹）の大学生の研修を当センターで行ったこともありました。子ども達と接することやスタッフから学ぶことがこれから社会に出て働く大学生には役立ったようで、関係者から感謝されたこともありました。



公民館文化祭出店

先生方の相談も、学校とのトラブルの相談もあるのですね。

多忙とストレスで追い込まれる教師達の相談も

また、当センターには、現職の先生や休職中の先生も相談に来られます。

今の時代、学校は多忙、保護者や世間からの厳しい視線に、先生方は、疲労し孤立し精神的にも肉体的にも追い込まれている人も多いのです。心身の病気で休職している先生も増えています。

数十年学校現場で勤務していた経験を持つ小・中・高校の元教師が、それぞれに助言をしています。中には、休職中の先生が、来室している子ども達とふれあうことで元気になられたという例もあります。

学校と保護者間のトラブルへの助言も

学校と保護者、保護者間のトラブルも持ち込まれます。

学校の姿勢や対応に問題を感じるケースもあれば、保護者の無理解を感じるケースもあります。

総じてトラブルの背景として、保護者の教育への不安があります。双方の表現や想像力の不足があり、人間関係が希薄になっていると感じる時もあります。

私たちは、相談者から話をうかがい、必要な助言をしますが、中には、当センターが学校と親の間に入って、話し合いを進める場合もありました。

学校の対応への助言もしたケースもあります。吹田の小中学校との関係が深い元教師が中心の当センターならではの事だと思えます。

2 行政や他団体との協力や連携について



トランプゲーム

—他の団体と協力したり連携することはありますか。

「吹田市子ども・若者支援地域協議会」に加盟

吹田市の教育委員会、福祉課、各小中学校を始めとする吹田市の各機関と協力・連携を図ると共に、「吹田市子ども・若者支援地域協議会」にも団体加盟しています。また、吹田子ども支援センターは基本的には小学生・中学生・高校生世代を対象としているので、高校生以上については、近くだと千里山駅近くの「NPO 法人フルハウス」などを紹介します。

幼児だと、親の集まりである「ゆう・きっず」…とか。吹田市の適応指導教室「学びの森」「光の森」を知らなければ、活動内容や入室手続きの方法を紹介したりもします。また、市内の心療内科とも連携しているので、必要な人には医療機関を紹介します。因みに、連携している心療内科に通院していた不登校の子3名が、当センターへも来るようになり、現在高校へ通っています。

就職を希望されている場合は、それぞれの支援機関や団体を紹介します。

「学校・行政関係者や市民団体との連携

学校の関係者や民生委員など地域で活動を行っておられる方々が、不登校等の子どもの保護者に当センターを紹介され、相談に来られる場合が多くあります。また、行政機関や市民団体からの紹介でも、相談に来られています。

3 日々の活動・運営の中で感じること、考えていること

—日々の団体の活動や運営、例えば資金や人材などについて、お考えのことがあれば、教えてください。

不登校・ひきこもり、教育トラブルなどを相談し、具体的な支援を受けたい人にとっては、相談する場所が身近にあることが重要な要素です。



子どもカフェ

いつでも、無料又は低料金で相談ができる配慮、相談者の時間的都合を優先した相談対応、専門的な知識や豊富な経験をそなえた相談員・カウンセラー・元教師などが真摯に対応することは当然の要素です。

いつでも気軽に相談できる身近な場所が必要

従って、当センターのような拠点を、市が主体となり行うか、または市民団体の行う活動を支援して、市内各地にできるようにしてほしい。

活動拠点として、児童館や公民館の一室、市の公共施設の一室、公営住宅の集会所や空き部屋などを活用することも一考かと思います。

また、他市のように、市民団体への財政的な支援として、活動団体への補助金拡充や業務委託、利用者への費用援助等もその方法の一つかと思います。

私は、教師生活を定年で終え 11 年目を迎えています。今なお、日々子どもと接することが楽しく、私がお役に立てていると実感した時には充実感を感じます。スタッフの方々も同じ思いです。この活動は、高齢化社会を迎えた今、専門性を生かした高齢者の社会参加の一つになると思っています。

4 10年後の吹田市を見据えた取組のアイデア

—今後を見据えた取組について、何が必要だと考えますか。

地域間も家庭間の格差も広がっているように思います。

だから、子育てや教育の問題についても、地域ごとに見る必要があります。例えば貧困世帯の多い地域、少ない地域での課題は異なります。

親の経済レベルが文化・教育のレベルに関ってきます。地域や家庭での格差がある中で、子どもはそれぞれに育っているのです。

地域実情を踏まえ、貧困と格差是正の施策を

地域間格差を是正する方向での行政の主体的な施策、家庭間の経済格差を見据え、特に子どもの貧困に対して重点的に具体的な取組をお願いしたいです。

それともう一つは、高齢者が世の中に参画していく方法と、少子化や核家族が抱えている問題をつなぎ合わせるような施策を企画していただければと思います。

—10年後の吹田は、どんなまちにしたいですか

行政のビジョンの確立と市民互助組織の支援を



教育講演会

総合計画ということで10年後を見据えるなら、地域のつながり、市民活動が活発になる市にしてほしいですね。

それと、地域間や家庭間の格差の問題がある中で、教育のみならず、行政として経済的に厳しい層の現状を積極的に捉えて、格差を埋めてほしい。

また、都市化・核家族化で地域の連携やコミュニティのつながりが弱くなり、問題が生じた場合は、個人や家庭など自身のみで解決を迫られる時代になってきています。

市民が助け合う仕組みを支援し、行政がすべての人が心地よく住めるまちのビジョンを明確にし、年次計画を立て、実現していく必要があると思います。

※ 2017年5月発行された報告集に一部加筆修正しています。

見出しや写真を追加しています。

2018年5月第2版発行：文責森本